
Gor for broke ! **当たって砕けよ**

廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G o r f o r b r o k e ! 当たって砕けよ

【Nコード】

N 3 6 2 2 E

【作者名】

廉

【あらすじ】

大学生の紗穂は、好きな男に会いたいために、彼が通うファミレスの向かい側に立つ「代理事務所」でバイトを始める。彼女はそこでイケメン従業員に出会うが、そこは一步間違えれば命を落としかねないようなあり得ない事務所だった・・・彼女の恋の行方は？

第1回 『代理』のバイト（前書き）

コメディあり、恋愛あり、少しミステリー、少しシリアス。

そんな感じの話にしたいと思っています。

久しぶりに女の子を主人公にしてみました。

気軽に読んでください。

第1回 『代理』のバイト

あの人に会うためならなんだったでする。

大きく深呼吸をして、高宮紗穂は目の前の扉のインターフォンを押した。しかし、気合を入れたのに返事がなく、仕方なく何度も何度も押してみると、

「うるせえっ!!」

そんな声と共にドアが勢いよく開かれた。あまりにも勢いが良すぎて、紗穂の体にどすつと当たって数メートルぶっ飛ばされた。

「あれ？お客さん？」

クリーンヒットした腰を押さえながら紗穂は起き上がる。でも、なるべく笑顔で。ここへ来た目的を忘れちゃいけない。

そつだ。これも自分のため……

笑顔でドアを開けた主を見ると、意外にも若そうな青年だった。少し戸惑った表情でこちらを見ている。茶髪で爽やかそうな人だ。

「あ……すみません。大丈夫ですか？」

「私を雇ってください！」

青年の声と紗穂の声はほとんど同時だった。お互いに何を言ったのかわからずに、しばらく目をぱちくりとさせる。しかし、すぐに青年のほうがくりりと180度向きを変えてドアの中に入っとうとした。

げっ。慌てて紗穂は片足を突っ込んでそれを止める。

「ちよつと待ってください！雇ってくださいよー！」

「断る。人は足りてるんだ。だいたいここはアンタみたいな女が働くような所じゃないよ」

爽やかな外見とは裏腹に、青年の言葉には容赦がない。それでも紗穂は目的のためには手段を選ばなかった。足の他に顔をねじ込ませて強引にドアを開けさせる。青年も負けじと閉めようとするが、女相手に本気の力を出せないらしい。最終的には紗穂が勝った。

「面接だけでも受けさせてくださいー！」

「なんでここで働きたいんだよ？」

「そっ……それは……」

「言えないんならこの話はなかったことに」

そう言っただアを閉めようとする青年。

「わー！待ってください！言います、言いますからー！」

ようやく青年がドアを閉める手の力を緩める。そんなふうに変更られても、逆に困るんだけどと心の中で思いながら、紗穂はちらりとドアの向こうに広がる窓を見た。

「以前、駅の近くで男の人とぶつかっただんです。すごくカッコいい人で……ちょっと失礼ですけど、後をつけたんです」

「ストーカーだね」

「それで、ここの目の前に立つファミレスに週に2、3度通ってることがわかって……」

「で、ファミレスに行ったが雇ってもらえなかった」

「ああ、はい。今はバイトを募集してないみたいで、でもあの人に会いたくて……駅で待ってたらストーカーみたいだし」

「もうストーカーだろ」

「だから、目の前に立つここならストーカーだと思われなし、彼に会えるなって思ったんです」

「すごい理由だねー」

その瞬間を紗穂は見逃さなかった。ドアの隙間からびゅんと部屋の中に入り込む。青年の声が聞こえたような気がしたが、無視して駆けた。そして、大きな窓の向こうの世界を見た。

「わあああ！特等席だー！」

向かい側に立つ2階建てのファミレス。この部屋も2階だからちよつど真正面に見える。ファミレスで働けないのなら、もうここしかない。紗穂はすでにここで働く気でいた。

と、そのときあの人を見つけた。

しかし、喜びも束の間、後ろからひよいつと襟首を持たれた。

「住居不法侵入で訴えるぞ」

「あの人！私の好きな人です！やっぱカッコいい・・・」

紗穂が指差したテーブルには、1人の男が座っていた。天然パーマらしきぼさぼさ黒髪はやぼつたような男。それに加えて眼鏡もかけていて、はつきりと顔が見えない。紗穂の目にはそれがとてもカッコよく見えたが、青年の目には大学を20浪した人生にも世間にも遅れているような男に見えた。

「いつ見てもカッコいいなあ」

「趣味ワル〜」

「ここからじゃわかんないですよ。目がホタルイカみたいでいいんです」

「なにソレ？褒めてんの？」

青年の言葉を無視して、再び紗穂は彼に向き直る。もうここしかないんだ。

「お願いします！雑用でもなんでもやります！だから、私を雇ってください！」

しばらく彼は窓の向こう側を見ていたが、やがてこちらを向いた。よく見ると、すごくカッコいい顔をしている。女の子にモテモテだろう。

「時給850円、俺の下での手伝い兼雑用で良ければ、なら」

「もちろんです！やらせてください！」

思ったより待遇がいいし、なにより雇ってもらえたことが嬉しかった。21歳にもなつて万歳して喜ぶ紗穂に青年は1つ付け加えた。「ただし、どんなことがあっても仕事を途中で放り出さないこと。それと、ここで知ったことは他言しないこと。それが条件だ」

「大丈夫です。私、友達にけっこー執念深いか、秘密主義だつて言われるんです」

「その友達、絶対褒めてないよね」

「最後まであきらめないとやってくださいよ」

「あきらめが悪いとも言っね」

爽やかなのに意外に毒舌家だ。それでも、あの人に会うためならなんだってするんだ。頑張っここで働こう。

翌日から早速バイトをすることになった。

後でわかったことだが、紗穂が働こうとしていた所は『常盤代理事務所』というらしく、部屋のドアのガラスにそう看板が立っていた。今さらだが、どんな会社なのだろうか。

がちやつとドアを開けてみる。何人かの従業員が出迎えてくれると思ったのだが、しかし誰もいない。昨日の青年もいないようだ。

来たらまずタイムカードを押して。

昨日青年が言っていたので、紗穂はカードを押しに行く。すると視界の片隅で急に何かかもぞつと動いて、おもわずぎゃつと叫んでしまった。

「あれ？おはよー」

爽やかな顔が台無しになるくらい、不機嫌な顔で青年が起き上がった。どうやら床に寝そべっていたらしい。改めてみると、汚い事務所だから少し搜したくらいじゃ床に寝ている人なんて荷物に埋もれて全く見えないことがわかった。

「おはようございます！えっと・・・社長って呼べばいいんですか？」

同い年くらいの青年に問いかける。自分を勝手に雇ったのだから、それなりに階級は上なのかもしれない。

「あ、そっか。言ってなかったね。社長は今出張中ではないんだ。残りの従業員も俺以外はみんな社長と一緒に。つっても、従業員3人しかないけど」

「え！？社長に無断でバイトを雇ってもいいんですか？」

「電話で言っただけだから大丈夫だよ」

そう言っ、紗穂から見たらただのごみにしか見えない塊の中からよれたルーズリーフを取り出す。

「一応これに名前、住所、電話番号、生年月日、血液型書いて血液型はなにか関係があるのだろうか。疑問に思いながらも一通りのことを書き終えて青年に渡す。その爽やかだがなんとなく寝起きで不機嫌そうな顔がみるみる意外そうな顔になる。」

「俺より年上なの？21歳、大学3年？見えねー」

「じゃあ、あなたは年いくつなんですか？」

「19。あ、日生葵ひなせあおいっていいいます。よろしく」

そのとき、日生の笑った顔を初めて見た気がした。笑うとえくぼができそうな頬と優しそうな瞳が印象的だった。紗穂も自然と笑顔になった。

この人もかつこいいけど、やっぱり1番は天パ王子だね。

内心で思っていると、突然日生が窓の外の人を指差す。ファミレスの前を歩いている若いサラリーマンだ。

「今からあの人の代わりになってもらうけどー・・・」

「は？」

「論より証拠。実際にやってみるぜ」

言うやいなや、ぱちんと彼は指を鳴らした。その途端、紗穂の体が急速に前に押されたような気がした。視界がぐるりと反転。思わず目をつむってしまった。そしてー・・・

そして、気づくと紗穂はファミレスの前に立っていた。

「おーい！どうだー？」

見上げると、事務所の窓から爽やかな顔が覗いている。あれ？さつきまでそこにいたはずなのに・・・っていうか、え？なんでスーツ着てるの？それに男？

紗穂は体をぱんぱんと叩き、足の間に手が行ったとき、急に後ろから引つ張られたような気がした。

気づくと、紗穂は事務所の中にいた。目の前には日生がいて、いつものまにか『自分』に戻っていた。

「あれ？あれ？なんで？」

「なんでって……ここは常磐代理事務所だから」
けるりと言い放つ日生。紗穂は開いた口がふさがらずに、ぼかんとしてしまった。

一体何が起こったのだろうか？っていうか、日生は何者なのだろうか？

ようやくはっとして、慌てて窓の下の若いサラリーマンを見る。彼は何事もなかったかのように歩いている。

「ここは代理事務所だから」

それは、もう1度繰り返し返された。

第1回 『代理』のバイト（後書き）

もし良ければ、感想お願いします。

第2回 超能力と最初のキス

田舎から出てきた紗穂さほは都会の大学に通うために1人暮らしをしていたが、あるとき駅前で若い男とぶつかってしまった。ちょうど急いでいたときなのに相手のかばんの中身が散らばってしまったので、仕方なく捨つの手伝っていると、お互いの手が触れ合ってしまった。

それが恋の始まりだった。

「お決まりにも程があるよね」

紗穂としてはかなりもじもじしながら打ち明けた事実なのだが、相手はあっさりと言い放った。爽やかな外見、笑顔とは裏腹に、この男は毒舌だった。

「日生さんも大人になればわかりますよ」

「21に見えない人がそんなこと言っても悲しいだけだぞ」

常盤代理事務所とぎわで働き始めてもう3日。このガラクタだらけの部屋を掃除する日々が続いているが、紗穂には気になることがある。

初日に体験した、あの幽体離脱をしたかのような妙な錯覚。あれ以来、日生がその力を使うことはなかったが、何を聞いても「代理事務所だから」と片付けられてしまふ。まさか本当に他人の代理を務めるわけじゃないだろう。

「そつだ、高宮。今日は別の仕事があるんだ」

そう言っつて、彼は紙に埋もれた冷蔵庫の中から白いメモ帳を取り出す。それをひょいっと紗穂の目の前に差し出した。どこかへの地図のようだった。

「午後6時までここにへ行って、書いてある番号に電話すること。常盤代理事務所って言えばわかるから」

「いいですけど、行って何をすればいいんですか？」

「行けばわかる」

「まさかヌードモデルの代わりをしるなんて言わないですよね」

「そんなこと人前で言つて恥ずかしくないのか？」

「にやるう・・・ふと向かいのファミレスに目をやってみたが、あの人はいなかった。」

書いてある地図をじっくりと見つめて、最初に思ったことは

「ヘツタクソな字。こんなんじゃないよどこだかわかんないよ」

かろうじて読めた字がたまたま知っている店だったから、なんとかたどり着くことができたが、こんなミミズがのたくって昼寝しかけたような字でわかるわけがない。

そして、着いた場所は予想外の場所だった。

「デパート・・・？」

一瞬呆然としかけたが、日生が言っていたことを思い出して慌ててケータイで電話をかける。番号も7と1、0と6が曖昧に書かれていてわかりづらい。

電話に出た相手は女だった。今からそっちに行くからと伝えられ、紗穂はデパートの前で待つことになった。

「お待ちせしました」

小走りでやつて来たのは若い女だった。あまり背も高くなく、スマートでボーイッシュな印象を抱かせる。少し気になるのが、足をかばって歩いていることだ。ケガでもしているのだろうか。

「常盤代理事務所の高宮です」

「工藤です。さつきそちらの・・・日生さん？つて方から電話をもらつて、そろそろ来るとは思つてたの。早速だけど、次の土曜日からお願いします」

「え？ちよつと待つてください。なんの話・・・ですか？」

慌てて尋ねたが、逆にきよとんとしたような顔をされた。

「なにつてヒーローショーに決まつてるじゃない。あなたはケガをした私の代わりに、ゼウスレンジャーのピンクの仮面をかぶつてく

れるんでしょ？」

「ちよつと待て。そんな話は聞いてないぞ。しかもゼウスレンジャーってなんなんだ？ネーミングセンスを軽く疑いたくなった。」

「私も階段から滑って捻挫ねんそくしなければ、こんなこと頼みたくなかつたんだけど、こればかりはね・・・だから、お宅に頼んだの。他のメンバーには迷惑かけたくないから、今からビシバシ練習するよ！」

紗穂の意見とは関係なく、話は勝手に進んでいった。

決めポーズはとにかく肘をまつすぐに伸ばすこと。怪人ナゾライタに捕らえられるが、レッドに助けられる。定位置は1番右端。

「だいたいのは覚えた。ピンク色の衣装を身にまとい毎日真剣に練習をした成果だろう。しかし、その隣で声を抑えて笑っている男がいる。」

「ちよつと黙っててください！気が散るんです！」

「やめて。そのカツコでこつち見ないで。ウケるから」

この失礼な男、日生葵はとうとう大声をあげて笑い出した。工藤から課されたのは家での個人的なレッスンだった。だから、バイト中だったが、こうして事務所で練習しているのにこの男は飽きることなく笑い続けている。

明日はいよいよヒーローショーの日だ。

「そんなに笑うんだったら、日生さんがやればいいんじゃないですか。あの変わった力で」

「あれは他の人に言うなよ？俺は他人のAさんの体にBさんの精神を入れることができるだけで、俺自身はできないんだよ」

「言っている意味がわからない。」

「鈍いなーわかれよ」

「わかれて言ったって、そんな超能力みたいなもの持ってる人なんて初めて見たんで無理です」

本当に外見とは正反対の性格をしていると紗穂は思った。

それが起こったのは、デパートの開店時間前、午前8時のことだった。打ち合わせのために紗穂はデパートへ行くと、なぜか人だかりができていた。

野次馬の中に入って、彼女はデパートを見上げる。見た目が変わったところはないようだが、なんとなく焦げ臭いような気がする。

「あの・・・なにかあったんですか？」

隣にいたおばちゃんに聞いてみると、彼女は顔をしかめながら答えてくれた。

「なんかデパートの中で火事があったみたいだよ。確か、屋上らしいけど」

屋上！？それは今日ヒーローショーをやるステージがあるところだった。

と、そのとき視界の隅で工藤の姿を見た気がした。あろうことが彼女は野次馬を押しつけてデパートの中に入って行ってしまった。

止める間もなかった。紗穂は一瞬で頭の中をフル回転させ、工藤の後を追いかけるという結論に至った。

「高宮！」

夢中で走っていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。「日生さん」

どうやら日生も人目を盗んでデパートの中に入ってきたらしい。つていうか、なぜここにいるのだろうか。

「火元は屋上のステージ裏らしいよ」

「そこ・・・私昨日ピンクの衣装を置いておいた場所です！」

工藤はそれを知って慌てて駆け込んでいったのか・・・衣装が燃やされないように・・・火災現場に1人で乗り込んでいく気なんだ。

「でも工藤さん危ないよ！それに、足を捻挫してて間に合わない！」

「じゃあ……しょうがないから高宮、お前代わってやれ。痛みは俺が引き受けるから。上手く動けよ」

「は？なに言ってる……」

その瞬間、日生の指がぱちんと鳴らされた。また引つ張られるような妙な体感。目の前がぐるりと反転する……

気づくと、ステージの前にいた。まだ火の回りはそんなに激しくない。とにかく衣装を運ばなきゃ……

ステージ裏まで転びそうになりながら駆け寄ると、まだどの衣装も燃えてはいなかった。思わず安堵の息を漏らす。まだ浅い付き合いいとはいえ、この衣装、特にピンクには愛着がわいてしまった。だから、燃えていなくて本当に嬉しかった。

きつと工藤も喜んでくれるだろう。

ふと、隣の全身鏡が目に入る。そして、気がついた。自分自身が工藤になっていることに。

「ええっ！？なんで？」

まさか、これも日生の力というのだろうか。とにかく顔や体を触ってみたが、

「高宮！アホなことやってないで早く来いよ！」

追いついた日生。紗穂は慌てて火から脱出するが、彼はごほごほっと咳き込んでしまった。っていうか、今来たばかりの日生がなぜこんなに咳き込んでいるのだろうか。少し気になったが、日生が持っていた消火器で火を消し始めたので、結局聞くことはなかった。

「うーんとね、何が起こったのか私自身もわからなかったの。ただ無我夢中で衣装を取りに行つて、気がついたら衣装を抱いていたのよ」

工藤はあつけらかなと言いつつ、事件当時のことは彼女自身も覚えていないらしい。

火事は大事にはならなかった。衣装も無事だったが、結局ショー

が行われることはなかったらしい。火事の原因もわかっておらず、火元もわからないらしい。

工藤も紗穂も日生も嚴重注意をされてこの話は終えることになる。

「日生さんの力ってすごいですね。こんな超能力があるなんて・

」

「こんなん自慢にもならないよ。事務所の人間以外は基本的には知らないから絶対言うなよ」

「言いませんけど・・・なんでそれを私に教えてくれたんですか？」

素朴な疑問を尋ねてみると、日生にじっと見つめられて・・・
そしてなぜか唇にキスをされた。

「!!!!!!?」

その笑顔が爽やかすぎた。

第2回 超能力と最初のキス（後書き）

猛スピードなような気がした話です・・・

うーん、日生は何を考えているんですかね？
次で紗穂の好きな男が出てくる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3622e/>

Gor for broke! 当たって砕けよ

2010年10月10日21時08分発行